

ドイツ語の未来形 werden + 不定詞への beginnen + 不定詞からの影響*

嶋 崎 啓

0. 問 題 設 定

ドイツ語の未来形は werden + 不定詞によって作られる。この助動詞 werden はもともと「～になる」を意味するコプラ動詞であり、下例の (1) のように主語の属性を表す名詞や下例 (2) のように形容詞と結びつくのが本来の用法である。その意味で、werden は下例 (3) のように、統語機能的に形容詞の一種と見なされる現在分詞とは結びつきやすいが (Wilmanns 1906: 173 を参照)、下例 (4) のような動詞的名詞である不定詞とは結びつきにくいはずである。

- (1) Er wird Arzt. (彼は医者になる)
- (2) Er wird groß. (彼は大きくなる) (>Er wird ein großer Mann. 彼は大きな男になる)
- (3) Er wird essend. (>Er wird ein essender Mann. 彼は食べる者になる)
- (4) Er wird essen. (>??Er wird Essen. 彼は食べるということになる)

実際、中高ドイツ語 (1050-1350 年頃) においては werden + 現在分詞の例は一定数見られるが、werden + 不定詞の例は滅多に現れない。しかし、初期新高ドイツ語 (1350-1650 年頃) には werden + 不定詞が多数用いられ、すでに文法化されている。従って、werden がどのような歴史的過程を経て不定詞と結びつくようになったかは、ドイツ語の文法化研究において一つの問題であり続けた¹。かつての研究では現在分詞の語尾が衰

* 本稿は、2016年5月29日に獨協大学で行われた日本独文学会2016年春季研究発表会における口頭発表「類縁形式との比較を通して見たドイツ語未来形 werden + 不定詞の歴史的発展」をもとにしている。

¹ ドイツ語の未来形の歴史的発達についての近年の研究を踏まえた全体的な概観を知るためには Dal/Eroms (2014: 151 ff.) を参照。

退して不定詞との区別がつかなくなったことを原因とする考えも出されたが², werden と結びつく場合にだけ語尾が消失したのは不自然だという理由で現在ではこの考えは否定されることが多い (Kotin 2003: 159 f. を参照)。

そこで近年注目を浴び始めているのが, beginnen + 不定詞からの影響である。beginnen は古くから不定詞を取り, 中高ドイツ語に現れる beginnen + 不定詞の用例数は非常に多い。そして, werden は beginnen と同様に開始相というアスペクト (動作様態) を表すので, beginnen + 不定詞からの類推で werden + 不定詞が発達したという考えが Krämer (2005), Pfefferkorn (2009) などから出されている。

本稿では, werden + 不定詞の成立に beginnen + 不定詞が与えた影響を実例を通じて検証し, 最終的に, beginnen + 不定詞からの影響は認めつつ, 開始相というアスペクトの一致にもとづく類推という考えについては否定すべきであるという結論を示したい。

1. werden + 不定詞と類縁形式の用例数の歴史的推移

まず, werden + 不定詞の用例数の歴史的推移を表 1 にまとめて示す。その際, 合わせて, beginnen + 不定詞や werden + 現在分詞, さらには sein + 現在分詞, sein + 不定詞といった類縁する形式の用例数も合わせて挙げる。

表 1 werden + 不定詞と類縁形式の用例数³

	Tristan (1210 年頃)	Schüler/Heidin (1300 年頃)	Ring (1400 年頃)	Tristrant (1484 年)
w. + 不	0	7 (2)	<u>44</u> (5)	<u>50</u> (7)
w. + 現分	9 (3)	0	11 (3)	0
w. + 現分 + und + 不	0	0	6 (0)	0
b. + 不	<u>93</u> (1)	<u>20</u> (0)	9 (0)	4 (0)
s. + 現分	9 (4)	1 (1)	0	4 (0)
s. + 不	0	0	0	3 (1)

² Bech (1901: 93 ff.), Paul (1968: 127), Behaghel (1989: 262)などを参照。また, Kleiner (1925: 58)のように, 不定詞の斜格の語尾が現在分詞の語尾と一致したために混同が生じたという説もある。また, Krämer (2005: 104 ff.)のように, werden + 不定詞が werden + 現在分詞を基礎として発達したことを認めながら, 現在分詞が不定詞に直接変化したのではなく, beginnen + 不定詞からの類推でもともと現在分詞を取っていた werden が不定詞を取るようになったという説もある。

³ w. = werden; b. = beginnen; s. = sein; 不 = 不定詞; 現分 = 現在分詞。「w.+現分+und+不定詞」は一つの werden が現在分詞と不定詞の両方を und を挟んで取る場合。数字は werden や beginnen や sein の数。Er wird sehen und sprechen のような場合 1 と数える。括弧内の数字は werden や beginnen や sein の直説法現在の数を示す。下線は一つの時代の中で用例数が最も多い形式。

表1で挙げられているのは、中高ドイツ語中期のゴットフリート・フォン・シュトラースブルク (Gottfried von Straßburg) の『トリスタン』(Tristen), 中高ドイツ語後期の作者不詳の短編韻文物語の『パリの学生』(Schüler von Paris) と『異教の女』(Die Heidin), 初期新高ドイツ語前期のハインリヒ・ヴィッテンヴィーラー (Heinrich Wittenwiler) の『指輪』(Der Ring), 初期新高ドイツ語中期の作者不詳の散文物語『トリストラント』の五つの作品からの用例数である。そのうち、調査を行った箇所は、『トリスタン』については全19,548行中の1~9,982行、『指輪』については全9,699行中の1~2,620行、散文『トリストラント』については5,193行中の1~2,529行だけである。また、『パリの学生』、『異教の女』については作品全体を調査したが、『パリの学生』は全体で40ページ程度、『異教の女』は100ページ程度の作品なので、もともとの分量が多くない。したがって、歴史的推移の傾向について何らかの結論を導き出すにはまだ調査の分量が不十分であることは否めない。しかし、このようなささやかな量の調査でも次のような歴史的な変化が見て取れる。

- ① werden + 不定詞は中高ドイツ語にはほとんど現れないが、初期新高ドイツ語にはかなり多く現れる。
- ② werden + 現在分詞は中高ドイツ語に現れ、初期新高ドイツ語にも見られるが、一貫して数は多くない。
- ③ beginnen + 不定詞は中高ドイツ語でさかんに用いられたが、初期新高ドイツ語では衰退する。

ここで注目すべきは、werden + 不定詞が増加するとともに beginnen + 不定詞が減少していることである。本論では beginnen + 不定詞が担っていた機能を werden + 不定詞が受け継ぎ、それが <werden の直説法現在> + 不定詞による未来形の成立につながったことを論じる。しかしその前に、次の章でまず、werden + 現在分詞は werden + 不定詞の成立に関与せず、sein + 現在分詞との関連で考察されるべきことを述べたい。

- (4) ドイツ語の未来形 werden + 不定詞への beginnen + 不定詞からの影響 (嶋崎)

2. weren+現在分詞

2.1. 古高ドイツ語の werden+現在分詞

werden + 不定詞は中高ドイツ語にほとんど現れないが, werden + 現在分詞は下の (5) のようにすでに古高ドイツ語 (750-1050 年頃) に現れる。

- (5) tho ward mund siner sar sprechanter (Otfrid I, 9, 29) (そこで彼の口はすぐに話せるようになった)

ただし, 古高ドイツ語では sein + 現在分詞の方が, werden + 現在分詞よりも多い ((6), (7))。

- (6) ther se ist zessonti, sih selbon missihabenti, / stozot sih io in thrati mit mihileru unstati. (Otfrid III, 7, 15-16) (その湖は波打ち, 落ち着かず, 絶えず激しく不穏にぶつかり合っている)
- (7) er was thiononti thar gote filu manag jar. (Otfrid I, 15, 2) (彼は長年そこで神に仕えていた)

おそらく werden + 現在分詞は sein + 現在分詞との関連の中で生まれた (Erdmann 1886: 98 f. を参照)。すなわち, sein + 現在分詞が「状態」を表すのに対し, werden + 現在分詞は sein + 現在分詞の「変化」を表す形として用いられた。ドイツ語史の中でやがては廃れる sein + 現在分詞が何を表していたかは明瞭ではない。一つの可能性としては英語の be + doing のような進行形の意味機能を担ったことが考えられるが, はっきりしたことは分かっていない。上の (6) は現代ドイツ語であれば, der See wallen, wogen のように, (7) は er diente のように, 単一の動詞で表現されるであろう。werden + 現在分詞もどのような意味機能を持っていたかは明らかでなく, あくまで sein + 現在分詞の「変化」を表す派生形という位置にとどまるように見える。

2.2. 中高ドイツ語中期の『トリスタン』の werden+現在分詞

上に挙げた古高ドイツ語の werden + 現在分詞は, werden が直説法過去の例であった

が、Kleiner (1925: 23) によると、古高ドイツ語の <werden の直説法現在 > + 現在分詞の例は3例にとどまる。それに対し、中高ドイツ語の『トリスタン』では、次のように werden が直説法現在となる例がいくつか見られる。

- (8) er wirt mich gerne sehende / und wirde ich ime verjehende / umbe sînen neven,
der hie stât. (Tristan 3987-3989) (もし私 [ルーアル] が彼 [マルケ] にここに立っている彼の甥 [トリスタン] のことを言えば、彼は喜んで私に会うだろう)
- (9) man wirt uns schiere komende an / von den burgaeren / mit übelîchen maeren.
(Tristan 8702-8704) (間もなく町の人々が悪い知らせを持って私 [トリスタン] たちの所へ来るだろう)

上の例を見ると、werden と現在分詞がそれぞれ独立した意味を持ち、「会う状態になる」、「言う状態になる」、「来る状態になる」のような意味を表すとは思われない。特に、(9) の現在分詞 komende (< komen = kommen 「来る」) は完了相であり、状態を表さないので、werden + 現在分詞が「ある状態になる」という開始を表さないのは明らかである。むしろ、これらの werden + 現在分詞は現代ドイツ語の未来形 werden + 不定詞に近い意味を表すように見える。ただし、werden + 現在分詞は、werden が直説法現在となる例が3例であるのに対し、直説法過去の例は6例であり、直説法過去の場合の方が多。その一部を下に挙げる。

- (10) und als er in vrâgende wart, / diu ritterschaft losete elliu dar (Tristan 4118/4119)
(そして彼 [マルケ] が彼 [ルーアル] に尋ねると、騎士達は皆耳を傾けた)
- (11) der nehte wart des landes maht / sô starc und alsô veste, / daz s'aber ir leiden
geste, / als schiere als ez wart tagende, / mit gewalte wurden jagende / und
manegen nider stâchen (Tristan 5504-5509) (夜の中に土地の軍勢 [バルターネ軍] は非常に強く堅固になったので、夜が明けるやいなや、彼らが嫌悪する客 [トリスタン達] を武力で追い立て、多くの者を突き倒した)
- (12) und also ez âbendende wart, / nu bereite man in zuo z'ir vart eine barken unde
ein schiffelîn (Tristan 7339-7341) (そして日が暮れると、人々は彼ら [トリ

スタン達] の旅のためにバーク船と小舟を用意した)

興味深いことに、上の (11) の最初の werden + 現在分詞文 (ez wart tagende) と (12) の文は非人称文である。現在分詞が非人称主語 ez (=es) の様態を表すとは考えにくい (tagendes es とは言えない) ので、werden + 現在分詞は、意味的に切り離せないまとまりとして、かなり文法化されていると言える⁴。ただし、未来形との関連で言えば、<werden の直説法現在> + 現在分詞の非人称文は見つからない。

一方、sein + 現在分詞には、sein が直説法現在、直説法過去の場合のいずれにおいても非人称文が見つからないので、この形はあまり文法化されていない可能性が高い。

(13) wirt s' einem andern gegeben, / sô ist mîn trôst und mîn leben / und al diu vrôude dâ hin, / ze der ich dingende bin (Tristan 8195-8198) (もし彼女〔トリスタンの架空の妻〕が他の誰かに娶られれば、私の希望と人生と、私が求めている喜びのすべてが消え去ります)

(14) die nâmen uns cleine unde grôz / und sluogen mînen koufgenôz / und allez, daz dâ lebende was. (Tristan 7583-7585) (彼ら〔海賊〕は私〔トリスタン〕たちから小さい物も大きい物も何でも奪い、私の商売仲間も、生きるものは何でも打ち殺しました)

数を比較しても、werden + 現在分詞と sein + 現在分詞はどちらも 9 例であり、werden + 現在分詞は sein + 現在分詞の派生形という位置を脱して、独自の文法化の道を進み始めたように見える。しかし、9 例という数は beginnen + 不定詞の 93 例と比較すると、依然として少数派であり、十分に発達しているとは言いがたい。

2.3. 初期新高ドイツ語前期の『指輪』の werden + 現在分詞

中高ドイツ語後期の『異教の女』および『パリの学生』には werden + 現在分詞の例はない。初期新高ドイツ語前期の『指輪』には 11 例見られる。その中には、下のよう
に完了相動詞の現在分詞の例が含まれる。

⁴ Kotin (2003: 153) は、werden + 現在分詞には非人称文がないと言うが、実際にはこのようにある。

- (15) Des wirt sei vindent einen fund, / Daz ïr die mâr leicht werdent kund. (Ring 1850-1851) (彼女〔メツリ〕は、その知らせが自分に分かるよう、何らかの手立てを見つけるだろう)
- (16) Sei ward mich nennent so zehant [...] Dar zuo naigt sie sich gen mir / Und gruost mich schon (Ring 2307-2310) (彼女〔ウェヌス〕はすぐに私〔メツリ〕を呼んだ。〔……〕そして私にお辞儀して、挨拶した)

中高ドイツ語の(9)の例と同じく、これらは「ある状態になる」という開始を表さず、werden が直説法現在形の(15)は現代ドイツ語の未来形とほとんど同等であり、werden が直説法過去形の(16)は単なる過去形の書き換えであるように見える。ただし、『指輪』には、非人称文の werden + 現在分詞の例は見つからない。また、数も 11 例にとどまり、依然として多くはない。

なお、この後の初期新高ドイツ語中期にあたる『トリストラント』には、werden + 現在分詞の例は現れない。

2.4. werden + 現在分詞の歴史的変遷についてのまとめ

werden + 現在分詞の例は古高ドイツ語の時代から存在し、中高ドイツ語中期には werden が過去形となる文の中に非人称文が見られるので、かなり文法化されていたと考えられる。また、中高ドイツ語中期以降には現在分詞が完了相動詞である例が現れるので、「ある状態になる」という意味を表すのではなく、werden が直説法現在の場合、ほとんど現代ドイツ語の未来形と同等の意味を表すと考えられる。しかし、用例数を見ると古高ドイツ語から初期新高ドイツ語前期まで一貫して少なく、十分に発達したとは言いがたい。そして初期新高ドイツ語中期以降にこの形は、現在分詞が形容詞として定着した場合（例えば er ist reizend 「彼は魅力的である」）を除いて消滅する。結局、werden + 現在分詞は sein + 現在分詞から派生的に生まれた形であったので、一旦は独自に発達しかけたものの、sein + 現在分詞が衰退するとともに存在意義を失ったと思われる⁵。

⁵ sein + 現在分詞に特別な意味特徴がなかったことについては、Kotin (2003: 165 f.) を参照。

3. werden + 不定詞

3.1. 中高ドイツ語後期の『パリの学生』および『異教の女』の例

werden + 不定詞は古高ドイツ語や中高ドイツ語中期の『トリスタン』には現れない。調べた資料の中でこれが最初に現れるのは、中高ドイツ語後期の『パリの学生』と『異教の女』である。まず、werden が直説法現在形の例を挙げる。

- (17) wan manger hande liute, / die du da wirst schouwen / von manenn und von frouwen, / der kumt vil zu der begraft. (Schüler 446-449) (というのも、あなたがそこで見るとであろう様々な人が男も女もたくさん埋葬に訪れるからだ)
- (18) waz wirt man wunders von im sagen! (Heidin 357) (人は彼についてどんな驚嘆すべきことを話すだろう)

上のような <werden の直説法現在> + 不定詞がどのような意味機能を持つのかは、用例が少ないのではっきりとは分からないが、これらを現代語の未来形の <werden の直説法現在> + 不定詞と同等と見なしても問題がないように思われる。なお、Leiss (1992: 196 ff.) は非完了相動詞を werden によって完了相化して未来形を作った言うが、上の (17) の不定詞 schouwen (=schauen) 「見る」および (18) の sagen 「言う」のいずれも非完了相であるとはいえ、これらが直説法現在形であったとしても未来を表すことは文脈から分かるので、非完了相動詞の完了相化のために werden を用いたとは考えられない。

次に、werden が直説法過去形の例を挙げる。

- (19) die liute wurden klagen / von grozer mitlidunge. (Schüler 410-411) (人々は大きな憐れみの心で嘆いた)
- (20) der künic wart sie vaste klagen. (Heidin 1658) (王は彼女のことを激しく嘆いた)
- (21) sî neic irem herren / und wart umb kêren / gegen dem kristenman und sach in zühtliclichen an (Heidin 529-532) (彼女は自分の夫にお辞儀して、そのキリスト教徒の方へ向きを変え、その人を恭しく見つめた)

上の werden が直説法過去形となる例では、不定詞が klagēn 「嘆く」となる例が2例あることが目を引く。また、(21) では、不定詞が umb kēren (=umkehren 「向きを変える, 方向転換する」) という瞬間的に事態が完結する完了相の動詞である。werden + 不定詞はもともと開始相を表したという考えがあるが (Wilmanns 177: 1906; Behaghel 1924: 261; Kotin 2003: 135 ff.; 重藤 2003), 瞬間的な事態には開始, 経過, 終結という三つの段階が想定できないので, そのような動詞が werden と組み合わせあって開始相を表すということは考えがたい。

3.2. 初期新高ドイツ語前期の『指輪』 werden + 不定詞

この時代から werden + 不定詞の用例は急激に増え、『指輪』には44例現れる。まず, werden が直説法現在形の例を挙げる。

- (22) Du muost dich heven aber aus / Und steigen auf meins puolen haus : / So wirst du sehen durch daz tach, / Waz sei tuo und was sei schaff. (Ring 1482-1485) (お前〔自分への呼びかけ〕は抜け出して, 恋人の家の上に上がらねばならぬ。そうすれば, お前は屋根から, 彼女が何をし, 何を行っているかが分かるだろう)
- (23) Da wirt man ir der wurtzen geben, / Wil mans behalten pei dem leben. (Ring 2027-2028) (もし人が彼女を生かしておこうと思うなら, そこで人は彼女に薬草を与えるだろう)
- (24) So wirt er mich leicht nemen aus / Und füeren mich zuos arzetz haus / vil schier und auch geswinde (Ring 1995-1997) (そうすれば, お父さんは私をおそらく連れ出して, 医者之家にすぐに急いで連れて行くだろう)
- (25) Daz wirt dir an dem abent guot, / So man dich im wirt legen zuo. (Ring 2232-2233) (人がお前〔メツリ〕を彼〔ベルチ〕と共寝させるその晩に, それ〔血〕はお前にとって有益なものとなる)
- (26) Und chümpft er in seinr herren land, / Daz pläterlein zerprist ze hand, / Daz pluot wirt hin so fliessen (Ring 2239-2241) (彼〔ベルチ〕が自分の領地に入り, その結果浮き袋が即座に破ければ, 血が流れ出すだろう)

上の例を見る限り、<werden の直説法現在> + 不定詞は、現代ドイツ語の未来形と同じ意味を表すように見える。少なくとも、非完了相動詞を完了相に変えるために werden が用いられているということはなさそうである。

ただし、werden が直説法現在形の例は werden + 不定詞の中では 44 例中の 5 例というように少数派であり、多くは werden が直説法過去形である⁶。下にその例を挙げる。

- (27) Die minn die ward seu reiten / Also ser, daz seu vergassen, / Was seu trunken oder assen. (Ring 1621-1623) (愛が彼らを強力に支配したので、彼らは何を飲むか、何を食べるかを忘れた)
- (28) Die oren ward sei reken / Und denken (Ring 1942-1943) (彼女〔メツリ〕は聞き耳を立て、考えた)
- (29) Des ward er sei do wäschen / Mit esseich und mit äschen, / Mit zwivel und mit mersaltz (Ring 2071-2073) (それで彼〔医者〕は彼女〔メツリ〕を酢と灰と玉葱と海塩で洗った)
- (30) Daz ward man so ze hand begraben (Ring 1232) (その女を人々はすぐに埋葬した)
- (31) Vil sanft ward er sich streken / Nider zuo den gsellen sein / Und schrein (Ring 1183-1185) (非常に穏やかに彼〔ネイトハルト〕は仲間のもとで体を伸ばして寝て、叫んだ)
- (32) Des ward er sich vil sere bsorgen und bhielt sei bis an dritten morgen (Ring 2203-2204) (そのことを彼〔医者〕は非常に心配し、彼女〔メツリ〕を三日目の朝までとどめた)

上の例では、<werden の直説法過去> + 不定詞が何を表すのかははっきりしない。例えば、(27) は「支配し始めた」という開始相の意味を表すと解釈することもできるが、不定詞を直説法過去形に変えても意味が変わらないようにも見える。その場合、

⁶ ただし、Kleiner (1925: 80) によると、14 世紀のアレマン方言の資料の調査では、werden + 不定詞は werden が直説法現在形の例が 64 であるのに対し、直説法過去形の例が 7 例であり、werden が直説法現在となる例の方が圧倒的に多いので、アレマン方言以外の方言を含む 14 世紀の全般的なドイツ語の用例調査を行う必要がある。

<werden の過去形> + 不定詞が直説法過去形の単なる書き換えとして用いられていると言えるかもしれない (Kleiner 1925: 83 を参照)。実際、次のように、開始相を表すとはまったく考えられない例も存在する。

- (33) Mätz gedacht ir an daz lerren / Und ward sich heven an ze werren (5263-5264)
(メッツは教えを思い出し、抵抗し始めた)
- (34) Wie oft so ward min närrel jehen (Ring 1412) (何度我が道化師〔ベルチ〕は言ったことか)

上の (33) では、werden が「始める」を意味する不定詞 anheben と結びついている。もし werden が開始相を表すとすれば、「抵抗し始めることを始めた」という奇妙な意味を表すことになってしまう。また、(34) では反復を表す oft を伴っており、これが開始相を表すとすると、「何度も言い始めた」という「開始の反復」を意味することになるが、このような反復において開始に焦点を当てるのは無意味であろう。

上の例では結局のところ、<werden の直説法過去> + 不定詞が何を表すのかは不明だが、次のように、不定詞の意味によってある程度グループ分けできるということを見ると、この形式は特定の意味機能を担っていたと考えるべきであろう。例えば、この形式は下のように「言う」のような発言を意味する動詞の不定詞から作られることが少なくない (上例 (34) も)。

- (35) Nabelreiber der ward jehen (Ring 1852) (ナベルレイバーは言った)
- (36) Cuontzo der ward fürbas jehen (Ring 1015) (クオンツはさらに続けて言った)
- (37) Der minnesiech ward sagen / Nach dem, und er sich best versach (Ring 1857-1858) (愛にやつれた男〔ベルチ〕は、自分が最もよいと思うままに言った)
- (38) Mätzli die ward sprechen (Ring 2172) (メツリは言った)

また、次のように「感じる」のような知覚を表す動詞の不定詞もよく用いられる。

- (39) Seht, do ward er erst enphinden, / Daz Chuontz im vor gesaget hiet (Ring 615-616) (見よ、彼〔ベルチ〕はようやく、クオンツが彼に予告したことを感じ

- (12) ドイツ語の未来形 werden + 不定詞への beginnen + 不定詞からの影響 (嶋崎)

た)

- (40) Der taidinch was so vil beschehen, / Daz sich her Neithart ward versehen, / Si gtörstin nit mer stechen. (Ring 646-648) (議論があまりにたくさん起こったので, ネイトハルト殿は, 彼らがもはや馬上槍試合をする勇気を持たぬことを感づいた)
- (41) Do ditz nu also was geschehen, / Fritz der ward sichs dings versehen / Und gedacht in seinem muot (Ring 1514-1516) (こうしたことが起こったあと, フリッツは事の次第を悟り, 心の中で考えた)

なぜ <werden の直説法過去 > + 不定詞において発言を表す動詞や知覚を表す動詞がよく用いられるのかは明らかでない。ただ, これらが開始を表すものではないということとははっきりと言えるだろう。

このような使用の理由が明確でない動詞のほかに, 特定の理由から類似する動詞が用いられていると推測可能な場合もある。

- (42) Doch ward im von we geswiden. (Ring 614) (しかし彼〔ベルチ〕は痛みで氣を失った)
- (43) Gen dem ritter ward er fertzen / Und sprach (Ring 1109-1110) (騎士〔ネイトハルト〕に向かって彼〔トルル〕は放屁し, 言った)
- (44) Die nasen ward er rimphen (Ring 527) (彼〔ベルチ〕は鼻にしわを寄せた)
- (45) Die sünd die ward seu reuwen, / Si ruoften nach mit treuwen (Ring 660-661) (罪を彼らは後悔し, 彼らほうしろから誠意をもって叫んだ)
- (46) Der rede ward den Twerg verdriessen (Ring 1000) (その話によってトゥエルクは不愉快になった)
- (47) Des ward den andern allen / Daz tämer missefallen (Ring 1386-1387) (他の皆にはそれによる騒音が不愉快になった)
- (48) Fritz der ward wüeten ser (Ring 1532) (フリッツは激しく怒った)
- (49) Die minn ward ir gevallen (Ring 2075) (愛が彼女〔メツリ〕の気に入った)

上の (42)-(44) では生理的な現象が, (45)-(49) では感情が表されている。これら

はいずれも、理性で制御されない動作を表す。そう考えると、次の(50)-(54)では激しい動作が表されているが、激しい動作は理性で制御されないという点で生理的な現象や感情と共通することが分かる。

- (50) Si wurden ireu hertzen pleuwen / Also ser, daz in daz bluot / Ze mund und nasen aus schluog. (Ring 681-683) (彼らは自分の心臓を非常に強く叩いたので、彼らの口や鼻から血が噴き出した)
- (51) Doch ward mans pengeln mit dem stro, / Daz die frawen schrien do / Von grund auf und gar ze vollen (Ring 1104-1106) (しかし人々が彼ら〔バルチとトルル〕を藁で叩いたので、女たちは腹の底から精一杯叫んだ)
- (52) In dem selben streben / Die kuo ward messen eben / Bertschin über seinen dank / Zwen stich in einem swank. (Ring 1440-1443) (この格闘のさなか、牛はまさにバルチに、バルチの予想に反して、一振りで二突き与えた)
- (53) Die hürner ward sie stertzen, / Lüejen und auch rauschen / Emmitten durch den hauffen. (Ring 1435-1437) (牛は角を上げ、うなり、集団の中へ音を立てて突進した)
- (54) Da mit so wurdens jausen / Hin wider zLappenhausen (Ring 862-863) (それで彼ら〔バルチとネイトハルト〕はラッペンハウゼンへ、急いで行った)

同様の見方は次の例にも当てはまるかもしれない。

- (55) Da mit ward sei der wurtzen essen / Also ser und unvermessen, / Daz sei ieso hiet vergessen, / Wo sei gestanden was und gessen. (Ring 2151-2154) (その言葉とともに、彼女〔メツリ〕は根〔男根〕を激しく節度なく食べたので、彼女はすぐに自分がどこにいるのかを忘れた)
- (56) Übersich so ward er sehen / Und schrein (Ring 572-573) (彼〔バルチ〕は上を見上げて叫んだ)
- (57) 'Halt ab, halt ab!' wurdens hönen. (Ring 583) (「やれえ、やれえ」と彼らは叫んだ)
- (58) Min briefel daz ward fliegen, Zum fenster in hin stieben / Und cham her, da es

Mätzen vand. (Ring 1923-1925) (我が手紙は飛んで、窓から中に飛び込み、メツツェのいる場所へ到達した)

- (59) Er ward sich in der seiten clagen (Ring 233) (彼〔トロール〕は脇腹が痛いと訴えた)
- (60) Sei ward sich in der seiten chlagen, / In dem pauch und in dem magen. (Ring 2187-2188) (彼女〔メツリ〕は脇と腹と胃の痛みを訴えた)

上の (55) では不定詞が *essen* 「食べる」であるが、通常の「食べる」とは異なり、理性を忘れた激しい動作を表す。また、(56) の *sehen* 「見る」は知覚を表す動詞、同所の *schrein* (= *schreien*) 「叫ぶ」および (57) の *hönen* 「叫ぶ」は発言を表す動詞でもあるが、我を忘れた激しい動作も表す。また、(58) では主語が無生物の「手紙」であるので、理性で制御されない出来事を表すのは言うまでもない。そうすると、(59)、(60) の不定詞 *clagen* (= *klagen* 「訴える」) も、「嘆く」という理性で制御できない動作として表現されている可能性がある。そしてまさに *klagen* 「嘆く」は、この形式が最初に現れた中高ドイツ語後期の (19)、(20) で用いられた不定詞でもある。このように <werden の直説法過去> + 不定詞が特定の意味の不定詞から作られるとすれば、それは単なる直説法過去形の書き換えではないということであろう。

それでは、<werden の直説法過去> + 不定詞が何を表すのかと言うと、おそらくそれは *werden* の意味から生じる意味であると考えられる。すなわち、*werden* は「生成」を表し、そこにはある種の「自発」の意味が含まれている。勿論、*werden* は *er wird Arzt* 「彼は医者になる」のように主語の意志による変化を表すこともできる。しかし、多くの場合は、*er wird bald Vater* 「彼は間もなく父になる」、*er wird groß* 「彼は大きくなる」、*es wird kalt* 「寒くなる」のように主語の意志によらない出来事を表し、そこには「勝手にそうなる」という自発性が含まれている。そうだとすれば、<werden の直説法過去> + 不定詞が表す理性に制御されない動作とは、主語の意志とは無関係に「勝手にそうなった」という自発性だと考えられる。

尤も、不定詞自体が理性に制御されない動作を表すとすれば、「自発」を意味する *werden* を追加するのは過剰だという疑問が生じるかもしれない。そして、*werden* が直説法過去形になるこの形式が 16 世紀には衰退していったということは、実際に *werden* の追加が過剰だったことを示すとも言えよう。しかし、単に *wüten* 「怒る」(上例 (48))

を参照)では「怒る」を表すだけだが、werdenを追加することによって「自分でもどうしようもなく怒る」という「必然性」を強調することができたとすれば、追加は単なる過剰ではなく、そこには表現上の効果があったと言えるだろう。

3.3. 初期新高ドイツ語中期の『トリストラント』の werden+不定詞

すでに werden+不定詞はこの前の時代の『指輪』において多数派となっていたが、初期新高ドイツ語中期の『トリストラント』では、単に多数派となるだけではなく、werden+現在分詞の用例は0、beginnen+不定詞の用例は4例というように、競合すると思われる形式が衰退している点が注目になる。まず、werdenが直説法現在形の例を挙げる。

- (61) bitt mit vnderthenigkeit. mich ewer vrlaube haben lassen. auch darzû helfen mit gesinde. vnd wz mir zû sölicher raiß noturfft sein wirt. (Tristrant 87-89) (私〔トリストラント〕にあなた〔リバリン〕が暇を与え、従者およびそのような旅で私に必要となりそうなものによって援助下さいますよう恐れながら御願ひ申し上げます)
- (62) Ey wie ein schöne ere etich das wirt. wo man in den landen sagen wirt [...] (Tristrant 863-864) ([……と] 人々が国中で言うとしたら、それはあなたに何とご立派な名誉となるでしょう)
- (63) darinn du selbs sehen vnd hören wirst. das der betrieger den wurme nicht bestanden noch ertöt hat. (Tristrant 911-912) (そこであなたはご自身で、その詐欺師〔内膳頭〕が竜を打ち負かしても、殺してもいないことを、見て、聞くことでしょう)
- (64) geet jr mitt mir. da wert jr sehen. wie dye sach vmb sy beyde gestalt ist. (Tristrant 1795) (あなた〔マルク王〕は私〔小人〕と一緒に行って下さい。そうすれば、あなたは、彼ら二人〔トリストラントとイザルデ〕の実情がどうなのかを見るでしょう)
- (65) wenn bestest du in mit vnrecht. das wirt dich reüen. (Tristrant 1017-1018) (というのも、あなた〔内膳頭〕が不正なまま彼〔トリストラント〕に勝てば、あなたはそれを後悔するだろう)

- (66) jecz wirt jch kalte als ein eyß. vnd wil also erfriern. yecz wird jch brynnen als ein feür. vnd dringet der schweiß durch alle meine gelyder. (Tristrant 1192-1194)
(今私〔イザルデ〕は氷のように冷たくなり、そのまま凍りそうかと思うと、またすぐに火のように燃えて、汗が体中から噴き出す)
- (67) jch wird den tag gen meyn freunden nimmer mer überwinden noch gen jm. vnd auch mir selbs. (Tristrant 1218-1219) ([そんなことをすれば] 私はもはや友に対して、彼〔トリストラント〕や自分に対して、この日を乗り越えることはできないだろう)

上に挙げた <werden の直説法現在> + 不定詞は現代ドイツ語の未来形と同じ意味機能を持つように見える。また、(61) では不定詞が sein であり、<werden の直説法現在> + 不定詞が新たな発達段階に入りかけていることを窺わせる。というのも、現代ドイツ語の未来形は er wird krank sein 「彼は(現在)病気だろう」のように、現在の事態についての推量を表すことができるが、その時に用いられる不定詞はほとんどの場合 sein だからである。そして、この用法が多く見られるようになるのは 16 世紀の資料においてであるが、その場合の不定詞はやはり sein である。ただし、(61) は現在の事態ではなく、未来の事態を表すので、まだ新しい発達段階に完全に入ったとは言えない。おそらく、まずはこのような未来を表す <werden の直説法現在> + sein が用いられるようになったあとで、そこから現在の事態の推量を表す未来形が生まれたと考えられる。

ただし、依然として werden + 不定詞の中で werden が直説法現在形である例は多くなく (50 例中の 7 例)、数が多いのは次のような werden が直説法過去形の例である。

- (68) das laster vnd vnere. darein er sich selbs geführt het. wart er aller erst bedencken vnd fürnemen. (Tristrant 1033-1035) (彼〔内膳頭〕は自分が陥った悪徳と不名誉を初めて考え、想起した)
- (69) vnd [der künig] ward jr vast droen mit fraißlichen Worten. (Tristrant 2289) (そして〔王は〕彼女〔イザルデ〕を恐ろしい言葉で脅した)

上の (68), (69) では werden + 不定詞がいかなる意味機能を持つのかは明らかでない。一方、次のように、意味機能ははっきりしないが、『指輪』の場合と同じく、特定の意

味を持つ動詞の不定詞による例も見られる。次の(70)は(35)-(38)と同じく発言を表す動詞、(71)は(39)-(41)と同じく知覚を表す動詞が用いられている。

- (70) Aucrat ward aber mit dem mândlin reden vnd schwûr bey seym haubt. ob es in die warheit nit gesagt het. so müst es sterben. (Tristrant 2001-2003) (アウクトラートは小人と話し、もしお前が本当のことを言わねばお前は死なねばならぬと自分の頭にかけて誓った)
- (71) Der kûng ward dz mercken. vnd fraget sein diener. wer die herlichen vnd kostlichen weigant wâren. (Tristrant 952-953) (王はそれに気づき、その堂々たる高貴な騎士たちが誰なのか自分の従者たちに尋ねた)

一方、やはり『指輪』で見たように、理性で制御されない動作を表す場合もある。まず下の(72)、(73)は生理的現象を表す例である。

- (72) in dem reden ward in ser dûrsten. vnd begeret zû trincken. (Tristrant 1114-1116) (おしゃべりするうちに彼〔トリストラント〕は喉が渇き、何か飲みたくなった)
- (73) Als aber alle erczney an jm vmb sunst vnd vnnûcz waren. vnd ward auch ye lenger ye krencker. vnd dye wunden ser faulen vnd schmecken. (Tristrant 423-425) (またあらゆる薬が彼〔トリストラント〕に効果なく役に立たず、時間が経つほど弱っていき、傷がひどく腐って、臭いを放ってきたので)

また、下の(74)-(81)のように、感情を表す場合も多い。

- (74) [...] gedacht er bey dem har das er mit jm gefürt het. das sy die frau wâre. die er sûcht. vnd ward in jm selbs schmollen. (Tristrant 799-801) (彼〔トリストラント〕は自分が持ってきた髪によって、彼女〔イザルデ〕が自分が探している婦人であると思ひ至り、密かに笑った)
- (75) Die kûnigin aber. leget sich nider vnd ward sich fast klagen. vnd begert von der brangel des wassers auß dem baumgarten. (Tristrant 1458-1460) (一方王妃〔イ

- (18) ドイツ語の未来形 werden + 不定詞への beginnen + 不定詞からの影響 (嶋崎)

ザルデ] は横になり、激しく嘆いて、ブランゲルに果樹園から水を汲んでくるよう頼んだ)

- (76) Do das die frawe höret. mercket vnd verstünd. die grossen trew vnd lieb. So Brangel noch zû jr het. vnd in söllichen grossen vnd letsten nōten sy noch nicht offenbaret. ward si sich selber veinten vnd hassen. (Tristrant 1512-1516) (后 [イザルデ] はそれを聞いて、ブランゲルがまだ自分に多大の誠意と愛着を持っており、そのような大きな究極の危機において真実を打ち明けなかったことを察知し、理解したとき、自分を憎み、嫌った)
- (77) Dye aber die sein wartetent die ward sölliches langes gebet gar übel verdrissen. (Tristrant 86) (一方彼 [トリストラント] を待っている者たちはそのような長い祈祷がすっかり嫌になった)
- (78) noch dann so ward in der enden. also ser laiden. das sy in kein weg lenger da beleiben mochten. (Tristrant 2587-2589) (それでもなお、その場所が彼ら [トリストラントとイザルデ] には、決してそれ以上そこにとどまることができないほどに嫌になった)
- (79) die maineten her tristrant riet dem küng. on ein frauen zû beleiben. vnd wurden in darumb sere hassen. (Tristrant 548-549) (彼ら [廷臣] はトリストラント殿が王に妻を娶らないままにいるよう助言したと考え、それゆえ彼をひどく憎んだ)

また、下の (80)-(86) のように、「泣く」のように、感情と生理的現象の両方を表す場合もある。

- (80) Als sy sahe das er tod was. ward sy zymmlich weynen. (Tristrant 398-399) (彼女 [イザルデ] は彼 [モルオールト] が死んでいるのを見て、相当に泣いた)
- (81) Da brangel das hort. warde sy jnniglichen wainen. (Tristrant 1389-1390) (ブランゲルはそれを聞いて、心から泣いた)
- (82) vnd in dem selben grossen herczenlichen laid [...] begert sy. das sy der böß geist sōlt hin nemen. vnd ward gar herczenlich wainen klaget auch so starck vnd ser (Tristrant 1520-1523) (そのような大きな心痛の中で彼女 [イザルデ] は、

自分を悪魔が連れ去ればよいのにと願い、心の底から泣き、とても強く激しく嘆いた)

- (83) Als Thinas das sahe. ward er herczlich wainen. vnd sprach. (Tristrant 2168-2169)
(ティナスはそれ〔トリストラントが罪人扱いされていること〕を見ると、心から泣き、言った)
- (84) die herrn tristrants pflagen die waren auch all betrübt durch die grossen klag. so diß zwen man fürten vnd wurden mit in wainen. (Tristrant 2189-2191) (トリストラント殿に付き添う人々も皆二人の男〔トリストラントとティナス〕の行う非常な嘆きに悲しみ、彼らとともに泣いた)
- (85) Als er zû Thintariol kame, auß dem schiff gieng. vnd in sein diener curneual ersahe vnd erkannt. ward er von großen freuden vnd lieb zâheren. (Tristrant 530-532) (彼〔トリストラント〕がティンタリオルに来て、下船し、その家臣クルネヴァルが彼を見て、その人だと分かったとき、彼は大いなる喜びと情愛で涙を流した)
- (86) mit dem kerten sy dannen. wurden alle drew zâhern vnd herczelich betrübt (Tristrant 2429-2430) (それで彼ら〔トリストラント達〕はそこを立ち去り、三人皆涙を流し、心から悲しんだ)

また、下の(87)は激しい動作を表す。

- (87) do wurden sy erzürnt stiessen die tür mit grossem zoren auf. (Tristrant 2271-2273) (そこで彼ら〔トリストラントを礼拝堂の前で待っていた人々〕は怒り、大いに腹を立ててドアを押し開いた)

以上のように、『トリストラント』における <werden の直説法過去> + 不定詞は、前の時代の『指輪』の(42)-(60)場合と同じく、生理的現象、感情、激しい動作など、理性で制御されない動作を表す場合が多い。

3.4. werden + 不定詞の歴史的推移についてのまとめ

werden + 不定詞は中高ドイツ語後期に用いられるようになり、初期新高ドイツ語前期にはすでにめずらしい形ではなかった。ただし、werden が直説法現在形となる例よりは werden が直説法過去形となる例の方が多く現れる。後者は過去の時間を表すので未来形とはなりえない。従来の研究では <werden の直説法過去> + 不定詞は開始相を表すと言われているが、実際の用例を見ると、不定詞の動詞そのものが開始を表す場合や、反復を表す副詞が付加された場合などがあり、werden が開始を表したとは考えがたい。むしろ、不定詞が「理性によって制御できない動作」を表す場合が少なくないことから、<werden の直説法過去> + 不定詞は「勝手にそうになった」、「やむえずそうになった」という自発性を表したと考えられる。

4. werden + 現在分詞 + und + 不定詞

初期新高ドイツ語前期の『指輪』には、下に挙げるように現在分詞と不定詞が und をはさんで werden と結びつく例が現れる。

- (88) Fluochend ward er und auch schelten / Umb sein ofenchruken baide. (Ring 591/592) (彼〔パン屋〕は自分の二本の火かき棒のために、悪態をつき、ののしかった)
- (89) Secht, do wurdens gasslent her / Und rumplen unter enander (Ring 1161-1162) (見よ、そこで彼らは突進し、入り乱れて走り回った)
- (90) Die wurden gumpend und auch possen / So ser, daz niemand gtorst genahen, / Die esel und die merhen zvahen. (Ring 1201-1203) (それら〔ロバと馬〕は激しく跳びはね、蹴ったので、誰もそのロバと馬を捕まえようと、近づく勇気を持たなかった)
- (91) Er ward dem spilman rüeffent bas / Und in die haustür possen / Mit zwain stainen grossen. (Ring 1311-1313) (彼〔ベルチ〕は吟遊詩人〔グンテルファイ〕にもっと大きな声で呼びかけ、二つの大きな石で玄関のドアを叩いた)
- (92) Der ward do lachent, daz er fartzet, / Und sprechen (Ring 2116-2117) (彼〔医者〕はそこで放屁するほど笑って、言った)

- (93) Daz ward sei rüwenschleichen clagen / Und sprechend (Ring 1958-1959) (そのことを彼女〔メツリ〕は後悔して嘆き, 言った)

上の例を見ると, 現在分詞と不定詞がほとんど意味の区別なく使用されていることが分かる。そこから, werden+現在分詞が werden+不定詞に移行したと考える人があるかもしれない。しかし, もしそのような移行が生じたとすれば, werden+現在分詞がたくさん使用されたあとに, 現在分詞と不定詞が混在する用法が現れ, 最終的に werden+不定詞の用法だけが残るという順序を踏むはずであろう。しかし実際には, この『指輪』はすでに werden+不定詞が werden+現在分詞を圧倒している時期であり, これより前の時期に現在分詞と不定詞が und をはさんで同時に用いられたという時期は存在しない。そうだとすると, 現在分詞が不定詞に移行したというよりは, むしろ werden+不定詞が発達した結果, 昔から使用されていた werden+現在分詞もそれに引きずられて使用を一時的に増やしたと考える方が自然であるように思われる。

5. beginnen+不定詞

beginnen+不定詞は中高ドイツ語で頻出し, 初期新高ドイツ語で衰退する。この形式の大半の例で beginnen は直説法過去である。したがって, これが未来形の成立に直接関与したとは考えられない。

ここで注目したいのは, beginnen+不定詞が開始相を表すとは解しにくい例があるということである (清水 1997 および重藤 2003: 42 頁以下を参照)。

- (94) vil schiere wart, daz Tristan / hunde unde jegere sehen began. (Tristan 5337-5338) (すぐにトリスタンが犬と狩人に会うということになった)
- (95) wint unde wâc begunde / sich sâ zerloesen und zerlân, / daz mer begunde nider gân, / diu sunne schînen liechte als ê. (Tristan 2462-2465) (風と波はすぐに止んで, 消え, 海は静まり, 太陽は以前と同じく輝いた)⁷
- (96) liut unde lant begunde / von langem leide erwachen / und sich ze vröuden

⁷ schînen も begunde にかかる不定詞であるが, 「輝き始めた」という開始相の読みが可能なので太字にはせず, 下線を引いてある。

machen, / ze wunderlîchem wunder. (Tristan 5280-5283) (人々と国は、まったく不思議なほどに、長い苦しみから目覚め、喜びに向かった)

上の例で不定詞が表す事態に開始と経過と終結という三つの段階があるとは想定しにくい。例えば、(96) の erwachen 「目覚める」は起こった瞬間に完結する事態であり、開始は終結を意味する。そのような三つの段階に分けられない事態において開始に特別に焦点を当てた表現が行われるとは考えがたい(上例(21)も参照)。

むしろ注目すべきは、下に挙げるように、<werden の直説法過去> + 不定詞に類似する意味を表す場合が多いということである。例えば、上の(35)-(38)に挙げた初期新高ドイツ語の<werden + 不定詞>と同じように、<beginnen の直説法過去> + 不定詞は発言を表す動詞の不定詞から作られることが多い(清水 1997: 493 頁以下を参照)。

- (97) er begunde in vremdiu maere sagen (Tristan 2694) (彼〔トリスタン〕は彼ら〔巡礼〕に不思議な話を話し始めた)
- (98) sus kam s'in den gebaerden dar, / als sî sîn angest wolte clagen / und begunde im tougenlîche sagen, / ir vrouwe wolte in gerne sehen (Tristan 1258-1261) (かくて彼女〔ブランシェフルールの教師〕は、彼〔リヴァリーンの〕苦境を嘆くためであるかのような素振りでそこ〔リヴァリーンの所〕へ行き、自分の主人〔ブランシェフルール〕が彼に会いたがっているところそり彼に言った)
- (99) sus begunde er sînem hêrren sagen / von ende sîniu maere (Tristan 3312-3313) (このように彼〔狩人〕は自分の主君〔マルケ〕に彼〔トリスタン〕のことを始めから話した)
- (100) si begunden eines mundes jehen, / daz nieman von dem liste / niht bezzers enwiste (Tristan 3476-3478) (彼ら〔マルケ達〕は異口同音に、これ以上によい技を誰も知らないと言った)
- (101) si begunden vil swinde / reden ze sînen dingen / und in ze maere bringen, / er waere ein zouberaere. / diu vorderen maere, / wie er ir vînt Môrolden sluoc, / wie sich sîn dinc z'Îrlant getruoc, / des begunden s'under in dô jehen, ez waere ûz zoubere geschehen. (Tristan 8328-8336) (彼ら〔マルケ宮廷の人々〕は彼〔トリスタン〕について非常に厳しく言い、彼が魔法使いであると彼の噂を

立てた。彼が彼らの敵のモーロルトを打ち倒したことや彼がイールラントでどうなったかなど、以前の話についても、魔法で起こったと仲間内で言った)

また、初期新高ドイツ語の(39)-(41)に挙げた <werden+不定詞> の例と同様、知覚を表す動詞の不定詞が *beginnen* と結びつくことも多い(清水 1997: 491 頁以下を参照)。

- (102) *dô si die begunden sehen* (Tristan 3475) (彼ら〔マルケ達〕がそれ〔皮剥ぎ、フォーク刺し、犬への餌やりの技術〕を見たとき)
- (103) *Nu si sîn begunden nemen war / und in sô jaemerlîche var / und sô getânen sâhen* (Tristan 7547-7549) (彼ら〔デヴェリー人〕が彼〔トリスタン〕に気づき、彼がとても哀れな顔色と姿をしているのを見た時)
- (104) *dô daz der minnende man, / ir vriunt, begunde merken, / alrêrste begunde in sterken / diu minne und ouch sîn trôst an ir* (Tristan 1092-1095) (彼女〔ブランシェフルール〕の恋人であるその愛する男〔リヴァリー〕はそれに気づくと、愛とそれに対する彼の希望が彼を強くした)⁸
- (105) *sî begunden alle zuo z'im gân / und sîner dinge nemen war.* (Tristan 2860-2861) (彼ら〔狩人〕は皆彼〔トリスタン〕の所へ行き、彼の様子を観察した)
- (106) *nu die inneren begunden / ir lantbaniere erkennen, ir zeichen hoeren nennen, / si begunden ir rûm wîten, / ûz an die wîte rîten.* (Tristan 5584-5588) (内側の者たち〔トリスタン達〕は自分たちの軍旗を認め、自分たちの合い言葉が呼ばれるのを聞いて、場所を広げ、外の広い場所へ馬で進んだ)
- (107) *nu sî daz ors vunden, / daz gereite sî begunden / bemerken unde betrachten / und in ir sinnen ahnten, / sin gesaehen nie z'Îrlande / gereite solher hande* (Tristan 9331-9336) (彼ら〔イゾルデ達〕は馬を発見し、馬具に注目し、観察して、このような種類の馬具はイールラントでは見たことがないと考えた)

⁸ *beginnen*+不定詞で不定詞が知覚を表す箇所だけを太字とし、それ以外の *beginnen*+不定詞には下線が引かれている。(105)-(107)も同様。

そして、上の (42)-(54) で見たような理性で制御できない動作を <beginnen の直説法過去> + 不定詞も表す⁹。

- (108) sîn varwe und al sîn craft began / an sînem lîbe swachen. (Tristan 1436-1437)
(彼 [リヴァリーン] の顔色と体のすべての力は弱まっていった)
- (109) trîaken nam diu wîse dô, / diu listige künigîn / und vlôzte im der alsô vil î, / biz daz er switzen began. (Tristan 9436-9439) (そこで賢明な才知に長けた王妃 [母イゾルデ] はテリアク [解毒剤] を取り出し、彼 [トリスタン] が汗をかき出すまで、それを彼の体内に流し込んだ)
- (110) nu'z an die naht begunde gân / und er ze sînem schiffe kam / und al sîn dinc dar an genam, / dô vand er sîne vrouwen dâ (Tristan 1578-1581) (夜になり、彼 [リヴァリーン] が船の所へやって来て、自分のすべての物をそこに入れた時、彼は自分の婦人をそこに見出した)
- (111) dô er mit vrôuden blûen began, / dô viel der sorgen rîfe in an (Tristan 2079-2080) (彼 [トリスタン] が喜びに花咲き出した時、憂いの霜が彼に降りかかった)
- (112) ouch begunde von dem maere / den anderen allen / ir ougen über wallen. (Tristan 4218-4220) (その話によって他の皆の目も涙にあふれた)
- (113) vil jaemerlîche er aber began / ze gote clagen sîn ungemach (Tristan 2586-2587) (また彼 [トリスタン] は神に自分の苦境を哀れに嘆き始めた)
- (114) Tristan der arme der huop dô / sô jaemerlîchez clagen an, / daz Curvenal sîn vriunt began / mit ime von herzen weinen / und solhe clage erscheinen, / daz al daz kielgesinde / von ime und dem kinde / unmuotic wart und sêre unvrô. (Tristan 2332-2339) (哀れなトリスタンは悲痛の嘆きの声を上げ、そのため友のクルヴェナルも彼とともに心から泣き、あまりの嘆きを見せたので、乗員全員が彼と子のためにつらく悲しい気持ちになった)
- (115) Gurmûn dô trûren began / und hiez gebieten al zehant / über al daz rîche z'Îrlant (Tristan 7204-7206) (グルムーンは悲しんで、すぐにイールラント全土に [ク

⁹ 清水 (1997: 496 以下) は、beginnen + 不定詞の多くが感情に関する動詞の不定詞によることを指摘している。

- ルネワールからの入国拒否を] 要求するよう命じた)
- (116) ez begunde s' alle erbarmen. (Tristan 7677) (それ [傷ついたトリスタンによる音楽] はすべての人々に哀れな気持ちを起こさせた)
- (117) nu Tristan den künic sehen began, / er begunde im wol gevallen vor den andern allen. (Tristan 3240-3242) (トリスタンは王 [マルケ] を見ると, 王のことが他の誰よりも気に入った)
- (118) nu begunde er in dô starke / und sêre wol gevallen. (Tristan 4076-4077) (今や彼 [ルーアル] のことが彼ら [マルケの宮廷の人々] は大いに気に入った)
- (119) diu maere begunden / genuogen missefallen / und iedoch niht in allen. (Tristan 9662-9664) (多くの人はその [トリスタンが見つからなかったというクルヴェナルの] 話が気に入らなかったが, すべての人ではなかった)
- (120) hie mite wart aber des hazzes mê, / des nides aber dô mê dan ê, / den si Tristande truogen, / und begunde ouch an genuogen / ûz brechen alsô sêre, / daz s'z in dô nie mêre / vor verhelen kunden (Tristan 8365-8371) (それによってまた彼ら [マルケ宮廷の人々] がトリスタンに抱く敵意や妬みは前より大きくなり, 多くの人から激しく噴出したので, 彼らはそれを彼に隠すことができなくなった)
- (121) dem begunden die gedanke sîn / ûf swellen harte grôze / von des trachen dôze (Tristan 9096-9098) (竜の叫び声によって彼 [内膳頭] の頭に考えが強く湧き上がった)

以上のような *beginnen* + 不定詞と *werden* + 不定詞の意味的類似を見ると, *beginnen* + 不定詞の意味機能が *werden* + 不定詞に受け継がれたという見方には一定の説得力があると思われる。勿論, *werden* + 不定詞が *beginnen* + 不定詞から影響を受けたという考えは Krämer (2005: 106 ff.) や Pfefferkorn (2009) ですでに提示されているものである。ただし, それらの説の根底にあるのは, *beginnen* と *werden* はどちらも「開始」を表し, その意味的類似から, *beginnen* が不定詞を取るように, *werden* も不定詞を取ることができるようになったという考えである。しかし, 実際の用例を見ると, 中高ドイツ語の <*beginnen* の直説法過去 > + 不定詞も, 初期新高ドイツ語の <*werden* の直説法過去 > + 不定詞も, どちらも多くの場合に「開始」を表さない。むしろ, <*beginnen* の直説法

過去 > + 不定詞が表していた「理性によって制御されない動作」という意味が <werden の直説法過去 > + 不定詞に受け継がれたと見る方が、実際の用例に適っていると思われる。

6. ま と め

中高ドイツ語において、<beginnen の直説法過去 > + 不定詞はしばしば、理性で制御されない動作を表すために用いられるようになった。その機能は、おそらく中高ドイツ語後期に <werden の直説法過去 > + 不定詞に受け継がれた。そのように、<beginnen の直説法過去 > + 不定詞の機能が <werden の直説法過去 > + 不定詞に受け継がれたのは、werden が beginnen のように開始相を表すからではなく、beginnen + 不定詞が werden + 不定詞のように「理性で制御されない動作」、すなわち、ある種の「自発」を表すからだと考えられる。

未来形の <werden の直説法現在 > + 不定詞が、<werden の直説法過去 > + 不定詞の発達からどのような影響を受けたかは依然としてはっきりしない。しかし、werden の直説法現在形が不定詞と結びつくのに抵抗がなくなったのは、<werden の直説法過去 > + 不定詞が発達したためであろう。そして、werden の直説法過去形が不定詞と結びつくようになったのは、beginnen が不定詞を取ることからの類推が働いたためであろう (Wilmanns 1906: 177 を参照)。各形式の歴史的推移とその影響関係をまとめると、次のようになる。

- ① 中高ドイツ語中期: <beginnen の直説法過去 > + 不定詞が「理性によって制御されない動作」を表す。
- ② 中高ドイツ語後期～初期新高ドイツ語前期: beginnen の意味が、「自発」を意味する werden の意味に接近。werden が beginnen との意味的近似性から、類推によって不定詞を取って、<werden の直説法過去 > + 不定詞の形で「理性で制御されない動作」を表す。
- ③ 初期新高ドイツ語前期～中期: werden が不定詞と結びつくことが一般的になり、werden の直説法現在形も不定詞と結びついて、未来形として確立する。

なお、werden + 現在分詞が中高ドイツ語である程度文法化されながら、結局は衰退したのは、この形式が sein + 現在分詞の一種の派生形であり、sein + 現在分詞が衰退したためであろう。

引用出典

- Otfrid = Otfrids Evangelienbuch. Hg. v. Oskar Erdmann. (ATB 49) Tübingen : Niemeyer 1973.
 Ring = Heinrich Wittenwiler : Der Ring. Stuttgart : Reclam 1991.
 Schüler/Heidin = Der Schüler von Paris. In : Novellistik des Mittelalters. Hg. v. Klaus Grubmüller. Berlin : Deutscher Klassiker 2011, S. 296-335/Die Heidin. In : dieselbe, S. 364-469.
 Tristan = Gottfried von Straßburg : Tristan. Bd. 1. Stuttgart : Reclam 1993.
 Tristrant = Tristrant und Isalde. Prosaroman. Hg. v. Alois Brandstetter. Tübingen : Niemeyer 1966.

参照した邦訳（ただし用例の訳は筆者による）

- H. ヴィッテンヴァイラー 『指輪』 田中泰三訳、早稲田大学出版部、1977 年
 ゴットフリート・フォン・シュトラーズブルク 『トリスタンとイゾルデ』 石川敬三訳、郁文堂、⁵1992 年
 『トリストラントとイザルデ』 小竹澄栄訳、国書刊行会、1988 年

参考文献

- Bech, F. : Beispiele von der Abschleifung des deutschen Partizipium Präsens und von seinem Ersatz durch den Infinitiv. In : Zeitschrift für Deutsche Wortforschung. 1. Bd. Straßburg : Trübner 1901, S. 81-109.
 Behagel, Otto : Deutsche Syntax. Bd. 2. Heidelberg : Winter 1989 (¹1924), S. 256 ff.
 Comrie, Bernard : Tense. Cambridge University 1990 (¹1985) (邦訳：バーナード・コムリー 『テンス』 久保修三訳、開拓社、2014 年).
 Dal, Ingerid/Eroms, Hans-Werner : Kurze deutsche Syntax auf historischer Grundlage. Berlin : Gruyter ⁴2014.
 Diewald, Gabriele/Habermann, Mechthild : Die Entwicklung von *werden* + Infinitiv als Futurgrammem. Ein Beispiel für das Zusammenwirken von Grammatikalisierung, Sprachkontakt und soziokulturellen Faktoren. In : Grammatikalisierung im Deutschen. Hg. v. Torsten Leuschner et al. Berlin : Gruyter 2005, S. 229-250.
 Erdmann, Oskar : Grundzüge der deutschen Syntax nach ihrer geschichtlichen Entwicklung. Stuttgart : Cotta 1886.
 Fritz, Thomas : Zur Grammatikalisierung der zusammengesetzten Verbformen mit *werden* – *werden* und die Modalverben im frühen Deutsch und heute. In : Vater, Heinz (Hg.) : Zu Tempus und Modus im Deutschen. Trier : Wissenschaftlicher Verl. 1997, S. 81-104.
 Kleiner, Mathilde : Zur Entwicklung der Futur-Umschreibung *werden* mit dem Infinitiv. Berkley : University of California 1925.

(28) ドイツ語の未来形 werden + 不定詞への beginnen + 不定詞からの影響 (嶋崎)

- Kotin, Michail L. : Die *werden*-Perspektive und die *werden*-Periphrasen im Deutschen. Frankfurt a. M. : Lang 2003.
- Krämer, Sabine : Synchrone Analyse als Fenster zur Diachronie. Die Grammatikalisierung von *werden* + Infinitiv. München : Lincom 2005.
- Leiss, Elisabeth : Die Verbalkategorien des Deutschen. Berlin : Gruyter 1992.
- Paul, Hermann : Deutsche Grammatik. Bd. 4, Teil 4, 2. Hälfte. Tübingen : Niemeyer 1968 (¹1920).
- Pfefferkorn, Oliver : Die Konstruktion *beginnen* + Infinitiv als Futurperiphrase im Mittelhochdeutschen. In : Von Ion der weisheit. Gedenkschrift für Manfred Lemmer. Hg. v. Kurt Gärtner/Hans-Joachim Solms. Sandersdorf : edition scriptum 2009, S. 176-192.
- Saltveit, Laurits : Studien zum deutschen Futur. Bergen : Norwegian Universities Press 1962.
- Westvik, Olaf Jansen : Über Herkunft und Geschichte des *werden*-Futurs. In : Raum, Zeit, Medium – Sprache und ihre Determinanten. Hg. v. Gerd Richter et al. Darmstadt : Hessische Historische Kommission 2000, S. 235-261.
- Wilmanns, Wilhelm : Deutsche Grammatik. 3. Abt., 1. Hälfte. Strassburg : Trübner 1906, S. 171 ff.
- 重藤実 : 開始相表現の歴史と未来形『ドイツ語助動詞構造の歴史的発展をめぐって』重藤実編, 日本独文学会研究叢書 015 号, 2003 年, 39-48 頁
- 清水朗 : 中高ドイツ語構文 “beginnen + Inf.” のいくつかの局面『一橋論叢』118 卷 3 号 (1997 年), 487-502 頁
- 中村俊子 (雅美) : „未来形“ の用法拡大とその文文化について —— ルター聖書における未来表現の変更事例をもとに —— 『エネルギー』29 号 (2004 年), 23-37 頁

Der Einfluss der Fügung *beginnen* + Infinitiv auf die Entwicklung des Futurs *werden* + Inf. in der deutschen Sprachgeschichte

Satoru SHIMAZAKI

Das Verb *werden* bildet, mit einem Infinitiv verbunden, das futurische Tempus im Deutschen. Da aber *werden* eigentlich ein Kopulaverb ist, kann es sowohl mit einem Nomen, das die Beschaffenheit des Subjekts darstellt wie „Arzt“ in „er wird Arzt“, als auch mit einem Adjektiv, das die Art und Weise des Subjekts bezeichnet wie „krank“ in „er wird krank“, verbunden werden. Aber ein Infinitiv, der einen Vorgang oder Zustand ausdrückt, sollte nicht als ein Prädikativ von *werden* geeignet sein, denn wenn ein Infinitiv wie „kommen“ das echte Prädikativ von *werden* wäre, dann würde „er wird kommen“ solch ein komischer Sachverhalt, wie ein Mensch sich in einen Vorgang verwandelt.

In der Tat kommt die Konstruktion *werden* + Inf. im Mittelhochdeutschen ganz selten vor. Sie wurde erst in der frühneuhochdeutschen Zeit gebräuchlich. Stattdessen findet sich im Alt- und Mittelhochdeutschen zwar nicht oft, aber in einer gewissen Häufigkeit die Verbindung *werden* + Partizip Präsens. Aber es liegt nicht nahe, dass das Part. Präs. in den Infinitiv übergegangen wäre, denn da das erstere noch bis zum modernen Deutschen Gebrauch findet, wäre es sehr unnatürlich, dass ein Part. Präs. sich nur in seiner Verbindung mit *werden* in einen Infinitiv verwandelt hätte. Darüber hinaus darf man nicht übersehen, dass zwar die Fügung *werden* + Part. Präs. im Alt- und Mittelhochdeutschen vorkommt, aber nicht so häufig, dass das Part. Präs. sich in den Infinitiv transformieren könnte.

Seit ungefähr zehn Jahren wird also mehr Aufmerksamkeit auf die Form *beginnen* + Inf. gerichtet, die sehr oft im Mittelhochdeutschen vorkommt. Man sollte jedoch nicht vorschnell vermuten, dass die mittelhochdeutsche Fügung *beginnen* + Inf. deshalb in die frühneuhochdeutsche *werden* + Inf. übergegangen wäre, weil die beiden Verben dieselbe „inchoative“ Bedeutung hätten, wie in den bisherigen Forschungen behauptet wird. Denn beide Konstruktionen wurden manchmal benutzt, um einen punktuellen Vorgang wie „erwachen“ oder einen iterativen wie einen, der mit dem Adverb *oft* dargestellt wird, auszudrücken, wobei es sich bei beiden nicht um eine „beginnende“ Phase handelt. Wichtiger ist also, dass sowohl *beginnen* im Mittelhochdeutschen als auch *werden* im Frühneuhochdeutschen häufig mit einem Infinitiv verbunden wurde, der etwas nicht mit der Vernunft Kontrollierbares ausdrückt, wie einen physiologischen (z. B. „schwitzen“), emotionalen (z. B. „weinen“) oder heftigen Vorgang (z. B. „toben“). Ein überzeugenderes Szenario ist also, dass die Konstruktion *werden* + Inf. von *beginnen* + Inf. her zuerst die Funktion übernahm, einen mit Vernunft nicht kontrollierbaren Sachverhalt darzustellen, und sich erst dann zum futurischen Tempus entwickelt hat.